子どもNPOセンター Information Clip

インフォーメーション・クリップ

リーフレット

皆さんに子どもNPOセンターの活動を分かりやすく伝え、ご支援を頂くためにリーフレットを作りました。リーフレットを目にしたらぜひ手に取ってご覧ください。

あそべるおっきなハンカチ

1枚 1,000円
ハンカチ代の一部は
ふくいチャイルドラインに寄付されます。

取扱場所
◎福井市総合ボランティアセンター（ハピリン4階）
◎さばえNPOサポート（鯖江市）
◎Café levo（福井市）◎Vivan（勝山市）
◎つちカフェ（勝山市）◎手打ちそば八助（勝山市）
◎子どもNPOセンター事務所

保育園、幼稚園、児童クラブ、ご自宅などで、子どもNPOセンターの 楽しい！「手作り遊び」を使ってみませんか？

◎スマートボール　◎カウボーイ輪投げ
◎巨大ジェンガ　◎千本引き
◎空き缶つりぼり　◎皿まわし など

お気軽にお問合せください。

認定NPO法人 福井県子どもNPOセンターにご支援ください。

子どもNPOセンターは、国際条約でもある「子どもの権利条約」に沿って子どもの最善の利益を考えて日々の活動をつないでいます。

A. 賛助会員
子どもNPOセンターの目的に賛同し、活動を支援する会員。
●個人　一口年額／ 5,000円
●団体（法人）　一口年額／10,000円

B. ボランタリー会員
子どもNPOセンターの目的に賛同し、活動にボランティアとして協力・参加する個人。
●個人　一口年額／ 1,000円

C.一般寄付も受け付けています。
●郵便振替での寄付

入会方法

郵便振替の通信欄に、
❶住所 ❷氏名 ❸電話番号
❹会員の種類（左記ABCいづれか）
❺口数 を記入してお振込みください。

郵便振替
00770-1-45546
福井県子どもNPOセンター

●オンラインでの寄付　つながる募金
HPから簡単に子どもNPOセンターに寄付ができます。ソフトバンクが提供する「つながる募金」の寄付サービスを利用開始しました。ぜひともご支援を宜しくお願い致します。

つながる募金での
ご支援はコチラから

◎税制上の優遇措置について

「認定特定非営利活動法人」へのご寄付や、正会員以外の年会費等は、下記のような税制上の優遇措置（寄附金控除）が受けられます。ぜひご利用ください。

❶個人のご寄付
【所得税】（寄付金の合計額 −2,000円）×40%が税額控除されます。［上限：所得税額の25%］
【住民税】自治体によって異なります。お住まいの自治体にお問い合わせください。
【相続税】相続または遺贈により財産を取得した方が、取得した財産を相続税の申告期限内に寄付した場合、寄付をした財産には相続税が課税されません。

❷法人のご寄付〈法人税〉
一般寄付金の損金算入限度額とは別に、損金算入することができます。詳細については、最寄りの税務署にお問い合わせください。また、国税庁のウェブサイトでも手続きの詳細が掲載されています。

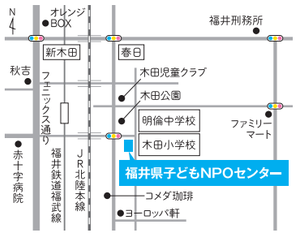
支援企業

●有限会社アドヴァンス近信（福井市）
●池田歯科医院（勝山市）
●有限会社演劇人冒険舎（名古屋市）
●岡山部品株式会社（福井市）
●大月産婦人科クリニック（福井市）
●春日装備株式会社（福井市）
●上屋敷工業株式会社（福井市）
●カフェリビングsu_mu（福井市）
●有限会社桑原産業グループ ハンドリームワークス!（鯖江市）
●けやき歯科クリニック（茨城県）
●さわやか矯正歯科クリニック（福井市）
●育ちのクリニック津田（福井市）
●第一防災株式会社（福井市）
●高沢内科医院（福井市）
●千歳工業株式会社（福井市）
●つちだ小児科（坂井市）
●人形劇団とんと（越前市）
●医療法人野尻医院（越前市）
●光タクシー有限会社（福井市）
●Vivan（勝山市）
●本定医院（福井市）
●医療法人まきレディースクリニック（福井市）
●益茂証券（福井市）
●益茂ビル（福井市）
●医療法人三井皮膚科医院（福井市）
●森のアトリエ（福井市）
●やしろ歯科クリニック（福井市）
●山内整形外科（福井市）
●六感デザイン（福井市）

Hop on Hop off

1歳半の孫娘、散歩中気になるのが歩道にある車止めの石。真ん中にある穴を面白そうにあちこちから覗き込んでいる。それが終わるとせっせと花や草を穴の中へ。私にとってはただの車止め、でも孫娘にとっては遊びが湧き出るわくわくトンネルだ。（ゆーみん）

記事、情報に関するお問い合わせは福井県子どもNPOセンターまで
認定NPO法人
福井県子どもNPOセンター
〒918-8106 福井市木田町36-1コーポ木田201号
TEL.0776-97-8460　FAX.0776-97-8461
E-mail childnpo@muse.ocn.ne.jp
URL http://childnpo.com　見てね！
ホームページ



企画・編集／福井県子どもNPOセンター　デザイン／六感デザイン

こどもChannel 2021 67号
2021年3月1日発行　通巻第67号

Take Free【無料】

「今」を生きる子どもたちと、かつて子どもだった大人たちをつなぐ情報誌。

バックナンバーは
こちらから

こどもChannel チャンネル

みる　きく　あそぶ　かんがえる

2021 67号
発行：認定NPO法人 福井県子どもNPOセンター　URL：http://childnpo.com

寄り添いのはじまり

Lien Projet 人権ファシリテーター 西野 有香 氏

未来のたね

「LGBTってあの"オネエ"の人達?」「自然の摂理に反する」「NGワードが増えるとやりづらい」「私の周りにはいない」…これらは今までに私が講師活動をしている中で出会ってきた言葉達。「男の子なんだから」「女の子なんだから」という言葉も日常の中に溢れている。

人権講師として性自認や性的指向についての課題に出会ったのは、今からおよそ六年前。当時教育委員会に勤めていた私は人権問題社会教育指導員という役職で研修などを受けていた。そこでたまたまいわゆるLGBTQという言葉に代表されるセクシャルマイノリティの子ども達の窮状をデータと共に学んだ。（マイノリティ=少数派）

2015年の電通ダイバーシティ・ラボの調査では社会の7.6%（およそ13人に1人）の割合でセクシャルマイノリティが存在しているとされる。もちろんみんなが"オネエタレント"の様ではなく見た目では分からない場合の方が圧倒的に多い。「学校ではバレないように精一杯"普通"に振る舞っていたけれど、内心いつバレるか常に怖くてストレスだった」そんな風に語ってくれる人もいる。

「ジェンダー平等」や「誰も取り残さない」という言葉が叫ばれる中、進学や就職、結婚、老後…それぞれのライフステージで新たな困難に直面してしまうにも関わらず、なぜ未だにジェンダーやセクシャリティについての理解や法整備が遅々として進まないのか。マイノリティには様々な名称がつくが、自分が「シスジェンダー」（心と体の性が一致）で「ヘテロセクシャル」（異性愛）であるということを知らずに生きている人が圧倒的に多い社会である。他人事になっていないだろうか。

ジェンダーについては物心ついた頃から違和感を感じている人も多く、七五三などのセレモニー、与えられるおもちゃ、服装（制服）など日常のすべてにおいてジェンダーで分けられるシーンに苦しむ。周囲から理解が得られていないことを肌で感じ取り、誰にも相談できずに精神的に追い詰められ、強い違和感や嫌悪感から学校に行けなくなってしまったりする子も少なくない。いじめ被害、不登校、自傷行為、自殺念慮、自殺未遂の生涯経験率がとても高い状態にあるというのも当事者を対象とした全国調査で明らかになっている。同調査の中には異性愛の男性と比較してゲイやバイセクシャル男性の自殺未遂リスクは5.98倍高いという結果もある。学ぶ機会・生きる機会すら奪われてしまっているのだ。

2019年にオープンした【おもちゃの図書館&雑貨カフェPetit（プティ）】では子どもも大人もワクワクすると同時にホッとする空間を目指している。おもちゃの他に絵本などもあるが、ジェンダーやセクシャリティに関するものがたくさん"混じって"いる。おもちゃにジェンダーを与え、子ども達に古いジェンダー規範を悪気なく伝えるシーンにもよく遭遇するが、その場合にはジェンダーで区別せずその子自身の「やってみたい」を尊重できるように後押しする。真っ白でフラットな子ども達の心がどんな風に育っていくかは大人（社会）にかかっていることを本当に痛感する日々である。

当事者かそうでないかではなく、みんなが当事者であるという考えを持ち、自分のものさしで見ない、ということが何より大切だと思う。それはきっとあらゆる人にとって優しい社会であり、その上で相手が何を求めているかを考えた時、本当の意味での「寄り添い」がスタートするのではないだろうか。1人で悩みや不安を抱えている子ども達が今この瞬間にもたくさんいる中で、安心して過ごせる日が1日も早く来るように、是非共にこの社会モデルへの道を歩んでいただきたい。

先が見えない今だからこそ

～コロナ禍の福井県子どもNPOセンター～

2020年2月末より、新型コロナウイルス感染症による私たちの生活は一変しました。
子どもNPOセンターの事業も子どもやボランティアが参集することは感染の危険性に及ぶのではないかという観点から、縮小せざるを得なくなりました。
しかし先が見えない今だからこそ、不安を抱えている子どもたちに目を向ける必要があります。できることからやっていこうと、緊急事態宣言解除後、お休みしていたチャイルドラインを始めることができました。また、大人の講座や研修は初めてリモートで開催しました。
このような状況で、今年度は収入が大幅に減少することから、私たちはNPO法人も対象となる「持続化給付金」の申請をしました。コロナとの共存が2年目になる春からは、感染対策を行いながら子どもたちに文化や芸術や遊びを届ける事業を再開します。大人の方もどうぞ感性が豊かな子どもと一緒に事業にご参加ください！

理事長　谷内 由美子

大人が学びあう講座 2020

子どもたちを取り巻く社会問題は私たち大人の責任です。子どもの育ちに目を向け一歩踏み出す大人を増やしていきたい、私たちは毎年様々な子どもの姿を発信してきました。
今年度は「地域の中で育つ」という視点で、子どもとの関わりを考える講演会＆座談会を行いました。コロナ禍のため初めてのZoom開催でしたが活発な意見交換ができました。

1回目 「子どもと大人の関係を考える ～子どもたちが自分の意志で行動するために～」

報告

とき：12月13日（日）10時～12時
講師：西川 正 氏（NPO法人ハンズオン埼玉理事）
参加人数：27名

講師の西川さんは、NPO法人ハンズオン埼玉理事。「おとうさんのヤキイモタイム」キャンペーンなどコミュニティを育むためのさまざまなプロジェクトを提案・実践。市民参画型の公共施設の研究に取り組んでいます。また、日本七輪党党首（日本コミュニティ七輪学会会長）であり、カブリモノ研究家、「公共施設」研究家、地域活動における「負担感」の研究家として、社会を見つめ、人と人とのつながりや構造をひも解いたり、コミュニケーションを深めるための「言語化」を進めています。
講義では、問いはひとつ「答え」はそれぞれであり、「応え」あう中で「おもしろさ」が生まれることを確認し、「子どもが元気に、今日を生きるために大切なこと」とは ①子どもが「主導権」を握る時間を一日の中で保障する ②たくさんの人とのかかわりが持てる生活にする。そして、自信が持てない子どもが増える中、子どもたちの時間の中に ①安心の保障（失敗もOK！） ②工夫の余地（試行錯誤歓迎！）の視点を関わる大人自身も持つことが大切である。ちょうどよい（工夫できる）「余地」があると楽しい（もっとやってみたい）が発生することを学びました。
Zoomでの講座は2回目でしたが「ブレイクアウトルーム」に初チャレンジ。講師、参加者、スタッフの皆さんの協力で楽しく学びあうことができました。子どもの主体性を適度に保つ大人のスタンスが、それぞれの実践に浸透していくといいですね。（小柏 博英）

2回目 「社会変容の今、活動を通じて感じること」

報告

とき：令和3年1月24日（日）14時～16時
参加人数：22名

昨年取り上げた「子どもの居場所」について、コロナ禍での子どもたちの生活の変化はどうだったのだろうか、今までの活動が維持できたのだろうか、居場所の運営に工夫したことなどを話していただいた。三者三様の居場所づくりは、コロナ禍で制限されても活動を自粛するどころか、何とかつながる方法を模索し活動し続けている。それが子どもたちの居場所になり、支えている側の居場所にもなっているように思えた。（桝家 彩子）

小野寺 玲 氏（福井スコーレ代表）

学校へ行くのがつらくて家からもあまり出られない子どもでも行けるセーフティネットとしての居場所づくりをしている。

「不信と孤立を深めている子ども達が多くいる。他者の中で生きていく意志はだれにとっても重要であり、他者の中で生きていくことの手助けが私の活動です。ただ、うまくいくときもいかないときもある。ささやかな活動と自嘲するよりもささやかだとしても出会った一人ひとりの子どものために何ができるか考えたい。感染症下でもより良い方法を模索したいと居場所について考え続けている。」

渡邉 一幸 氏（あわら敬愛こども園園長）

子ども食堂「まる」で月2回ボランティアによる食事の提供や遊びの提供、生活困窮者支援、学習支援の活動をしている。コロナ禍では、開催が不定期になったものもあるが、このような状況でも普通に家庭生活が送れるようにするにはどうしたらよいか考え食材の配布やマスクの配布などを実施した。

「課題のある家庭も多く自分たちの力では限られているので地域の皆様に助けてもらいながら頑張っていこうと思っている。子どもたちが大人になって地域で生活していくために地域と子どもの間を取り巻く存在としてかかわり、子どもの成長とともに私たちから離れ地域でやっていけるようになれば良いと考えている。
コロナ禍では、母親が就労の問題、子どもの小学校へ行けていない事など不安を抱えていたので24時間いつでも連絡してきていいよと対応した。また、「児童等見守り強化事業」の補助金を利用し、支援のはざまにいる子どもたちも大切にしていきたいと考えている。」

野尻 富美 氏（越前市「みんなの食堂」実行委員会代表）

子どもから高齢者、外国籍の方々、みんながつながる場所があればいいなと「みんなの食堂」を開設した。

「大事なことは、継続していくことで無理をしてはいけない、ちょっとだけある余力を集めて運営していこうとやっていた。コロナ禍になり、色々な制限がある中で活動の自粛も考えたが、今までのつながりを止めてはいけない。食事の提供が目的ではなく、このつながりを切らさないために何ができるかを考え、会う機会を作るためにお弁当の配布や色々なことを試した。そのことでスタッフにとっても自分の余力が役にたつならと活動していることがみんなのエネルギーになり、自分のエネルギーにもなることが確認できて自分たちの活動には大事だと思った。
コロナだから困ったというより困りながらやってきた活動なのでできる状況の中でやれることを考えてやっている。出来ることの中でつながり、つながりの中で力をつけてもらい、つながったらつながり続ける離さない。流れに身を任せてやれることをやっている。」

ふくいチャイルドライン 「ひとりじゃない」って伝えたい

18才までの子ども専用電話
毎日 午後4時～9時 ☎0120-99-7777

ふくいチャイルドラインは、福井県で新型コロナウイルス感染者が増えた昨年3月末から5月末まで、活動を休止しました。その大きな理由として、電話を受ける受け手ボランティアの方々の安全を最優先と考えたからです。スタッフと話し合い、何が一番大切なことなのかを考えた結果でした。
休校が明けた6月から活動を再開しました。受け手2人と支え手1人の体制とし、検温・消毒等の感染防止対策をとり、受け手の皆さんに安心して活動していただけるように、声をかけ合いながら進めてきました。
毎年開催している受け手ボランティアの養成講座は、オンライン開催としました。初めての試みでしたが、試行錯誤しながら2日間の研修日程を終え、受け手登録につながったことは、とても貴重な経験となりました。
感染状況により活動を休止する団体が多い中、活動継続可能な団体が子どもたちの声を受けてきました。また、子どもたちの声を受け止める別のツールとして、チャイルドライン支援センターがホームページ上に「つぶやく」を開設するなど、チャイルドラインとしてコロナ禍の活動を進めてきました。
一斉休校措置となった昨年2月末から4月末までに寄せられた子どもたちの声として、学習に関することや友人・家族関係など、ネガティブな感情・葛藤や迷い・戸惑いの感情が約8割にのぼりました。
現在も続いている行動制限の中で、さまざまなストレスを抱えた子どもたちの「いま」があります。一方で、子どもたちの前向きな声も少なからず寄せられ、子どもたちの力を感じることができる「いま」があるのです。
ふくいチャイルドラインとして、子どもたちの「いま」を聴き、子どもたちに何か伝えることがあるとすれば？

継続研修の様子

「ひとりじゃない」って伝えたい・・・。
この思いを胸に、子どもたちのこころの居場所の一つとなれるよう、受け手ボランティアの皆さんとともに活動していきたいと思っています。（ふくいチャイルドライン室長　岡田 伊佐央）

表現ワークショップ 適応指導教室 「みんなちがってみんないい」

報告

とき：12月14日（月）・1月21日（木）13時半～15時半
講師：梅田 美千代 氏、鴛田 静佳 氏　　参加人数：12月10名・1月17名

福井県内の適応指導教室（※）で表現活動を12月と1月に行いました。表現活動は演劇的手法を使って、子どもたちが何かになってみることで、その人だったらどう動くか、どう感じるかなどを身体で表現し、コミュニケーション力や想像力、自己表現力を高めていくことを目的としています。教室の子どもたちの表現は様々でしたが、みな誰の表現も否定しないので自由な発想が引きだされ、しだいに数人で関わりながら表現するようになりました。最後のプログラムでは思い思いに人や物、動物になりお互いに考えたセリフを掛け合って即興でひとつの物語ができあがりました。子どもがそれぞれのペースで人との関わりに心地良さを感じ、自分を表現することを楽しんでもらえるようにこの活動を続けていきたいと思います。（鴛田 静佳）

※適応指導教室・・・不登校児を支援する学校ではないもうひとつの居場所